

平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 教育プログラム及び審査結果の概要

◇「1.申請分野(系)」～「6.履修プロセスの概念図」:大学からの計画調書(平成18年4月現在)を抜粋

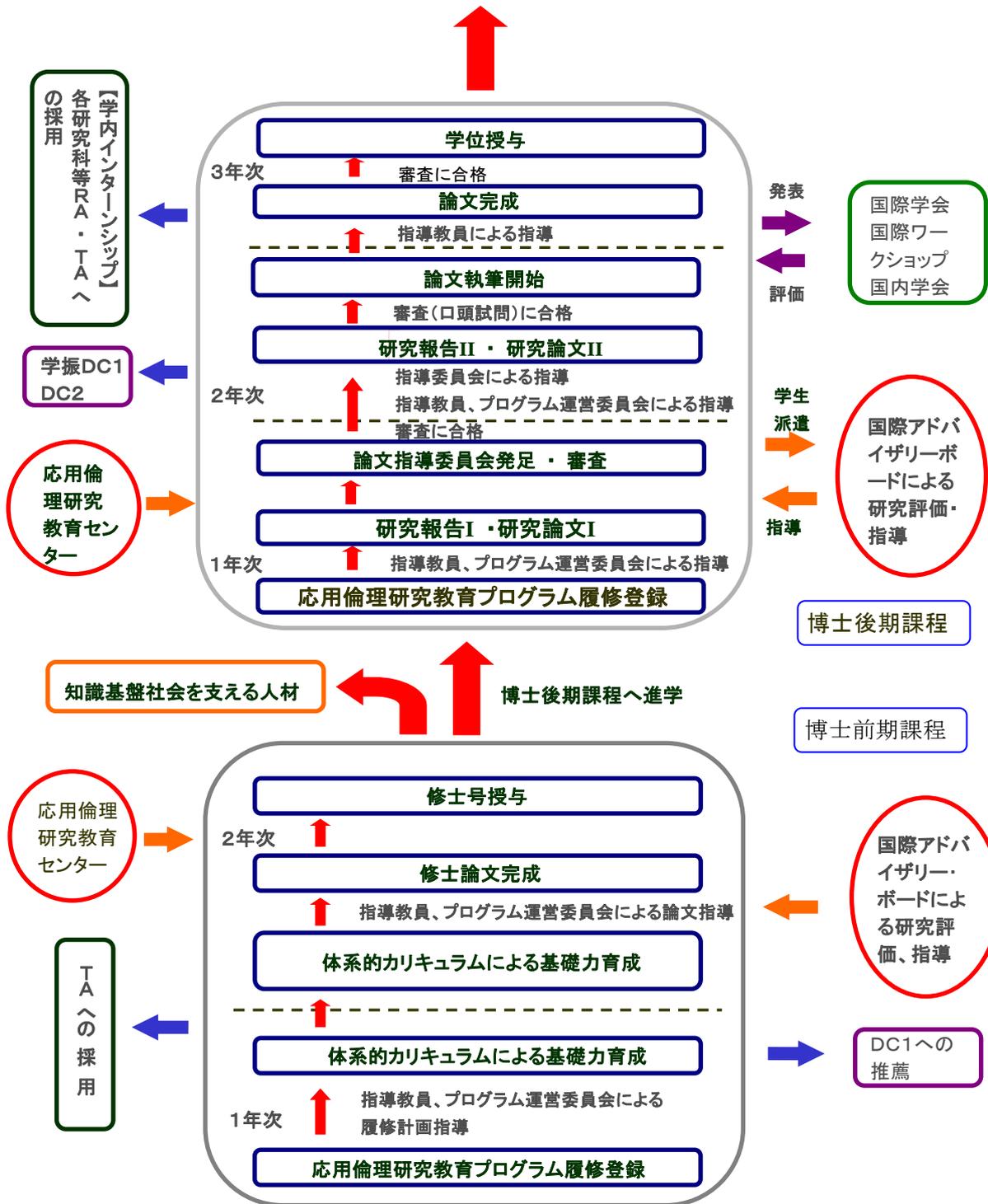
機 関 名	北海道大学	整理番号	d001
1. 申請分野(系)	人社系		
2. 教育プログラムの名称	応用倫理研究教育プログラム		
3. 関連研究分野(分科) (細目・キーワード)	主なものを左から順番に記入(3つ以内) 哲学		
	主なものを左から順番に記入(5つ以内) (哲学・倫理学、インド哲学・仏教学、宗教学、美学・美術史)		
4. 研究科・専攻名 及び研究科長名 ([]書きで課程区分を記入、 複数の専攻で申請する場合は、 全ての研究科・専攻を記入)	(主たる研究科・専攻名) 文学研究科・思想文化学専攻 [博士前期課程][博士後期課程]	<u>研究科長(取組代表者)の氏名</u> 栗生沢 猛夫	
	(その他関連する研究科・専攻名)		
5. 本事業の全体像(わかりやすく、具体的に記入してください。)			
5-(1) 本事業の大学全体としての位置付け(教育研究活動の充実を図るための支援・措置について)			
<p>本事業は高等教育機能開発総合センターや学内の他研究科・学院(先端生命科学研究院・生命科学院、理学院・理学院、工学研究科、農学研究院・農学院など)との密接な連携のもとに、応用倫理全般に関する研究・教育人材を養成することを目指すものである。また、本学の中期目標では「高度の専門性と高い倫理観を有し、様々な分野において活躍する指導的中核の人材を育成」することが掲げられている。本プログラムは全学的に利用可能な「応用倫理研究教育センター」を設置することにより、こうした本学全体の目標の達成にも寄与するものである。</p>			

機 関 名	北海道大学	整理番号	d001
<p>5-(2) これまでの教育研究活動の状況(これまでの改善点と、今後の課題について)</p> <p>これまで思想文化学専攻では、倫理学講座を中心として、他研究科との密接な連携のもとに分野横断的な教育実践を行ってきた。高等教育機能開発センター所属教員や理学研究科所属教員が責任者をつとめる工学倫理や科学コミュニケーション関連の授業に、倫理学講座に所属する博士課程をティーチング・アシスタント(TA)として参加させるなどの研究科の枠を超えた教育実践を行ってきた(平成15年度～17年度、延べ9名)ほか、思想文化学専攻に所属する教員が、理学研究科の大学院生をリサーチアシスタント(RA)として雇用するなど、他研究科と協力して研究・教育活動を行っている。また、平成14年度から15年度には、文部科学省科学技術振興調整費(科学技術政策提言)により「科学技術倫理教育システムの調査研究」(代表:新田孝彦・文学研究科教授)を行い、院生も研究員や研究補助者とし、4名の院生を雇用した。このうち3名は、現在、大学の講師や民間調査研究機関の研究員としてポストを得ている。さらに、平成17年度からは、文部科学省科学技術振興調整費(新興分野人材育成)の予算による「科学技術コミュニケーター養成ユニット」(代表:杉山滋郎・理学研究科教授)に倫理学講座のメンバーが参加し、新たな教育プログラムの立ち上げと運営に参加している。このように、倫理学講座のメンバーはこれまで分野横断的な教育実践に従事してきたが、こうした取り組みは思想文化学専攻全体には及んでいない。今後の課題としては、こうした取り組みを専攻全体に広げ、アジア的な価値観に関する専門的な知識を有する思想文化学専攻の人的資源の活用をはかるとともに、他研究科との協力関係を強化する必要がある。</p>			
<p>5-(3) 魅力ある大学院教育への取組・計画(5-(2)を踏まえた大学院教育の実質化(教育の課程の組織的展開の強化)のための具体的な教育取組、発展的展開のための計画、及びこの取組によって改善が期待される点について)</p> <p>上述した課題を踏まえ、本プログラムでは、応用倫理教育・研究の取り組みを思想文化学専攻全体に広げるとともに、他研究科との協力関係をより強化するための方策をとる。具体的な方策としては、思想文化学専攻の博士課程学生を生命科学院、農学院、理学院等の他研究科(学院)のティーチング・アシスタント(TA)またはリサーチ・アシスタント(RA)として派遣するとともに、これらの研究科(学院)から博士課程学生をTAまたはRAとして受け入れ、研究科の枠を超えたTA・RAの相互派遣を確立する。この方策により、これまで個別に行われてきたTA、RAの相互乗り入れを組織的・継続的に行うことができるようになるとともに、思想文化学専攻の倫理学講座以外の講座の参加により、宗教学的、芸術学的な視点を倫理教育の中に取り入れることが可能になる。また、海外の研究者によって構成されるアドバイザー・ボードを設置するとともに、院生をボードメンバーの所属機関に短期派遣することにより、教育研究プログラムの国際化をはかることとする。</p>			

6. 履修プロセスの概念図(履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)

履修プロセスと進路

大学などの研究者、PD、SPD、シンクタンク、NPO、NGO、国際組織など



機 関 名

北海道大学

整理番号

d001

<審査結果の概要及び採択理由>

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し重点的な支援を行うことにより、大学院教育の実質化(教育の課程の組織的な展開の強化)を推進することを目的としています。

本事業の趣旨に照らし、

①大学院教育の実質化のための具体的な教育取組の方策が確立又は今後展開されることが期待できるものとなっているか

②意欲的・独創的な教育プログラムへの発展的展開のための計画となっているか

の2つの視点に基づき審査を行った結果、当該教育プログラムに係る所見は、大学院教育の実質化のための各項目の方策が優れており、十分期待できるとともに、教育プログラムが事業の趣旨に適合しており、その実現性も、一定の成果と今後の展開も期待できると判断され、採択となりました。

なお、特に優れた点、改善を要する点等については、以下の点があげられます。

[特に優れた点、改善を要する点等]

- ・倫理学・応用倫理学の研究者・専門家と倫理学・応用倫理学の知識を身に付けた思想文化学の研究者を養成するとの目的は明確であり、科学技術、環境、生命、企業などの倫理問題が重要性を増しつつある現在、時宜に即した教育プログラムと評価できる。
- ・応用倫理の分野はかなり広汎であるため、教育プログラムを推進するための教育体制等の面で、さらなる工夫が望まれる。